資料２

「リバーサイドタウンかさまつ計画」について

１．笠松の歴史・文化、自然等の背景

①岐阜県の中心地

江戸時代には「美濃郡代笠松陣屋」が置かれ、明治にはその陣屋の建物が「笠松県庁」として利用されるなど、政治の中心地として発展し、交通の要衝として物資が集散する場所

②笠松へ続く道と川

笠松湊は木曽川流域最大の川湊で水運の中継地点として発展し、また長良川の鵜飼でとった鮎を江戸への献上用の「熟れ鮨」に加工して運ばれた「鮎鮨街道」が縦走し、尾張と美濃を結ぶ重要な湊として栄えた場所

③笠松湊周辺の商家など文化財や史跡が多く集積

国登録有形文化財である町屋造りの「杉山邸」や近代和風建築の「和田家」、県重要無形民俗文化財の「大名行列お奴」や「円城寺の芭蕉踊」が集積

④自然豊かな地域と洪水を克服してきた地域

木曽川が運んだ土砂が堆積しできた肥沃な土地、県下一のビオトープである木曽川の河跡湖「笠松トンボ天国」、同時に古くから「猿尾」や「聖牛」を築き、人々の生活を木曽川の洪水から防いできた場所

⑤健康増進や地域交流の場

運動公園、多目的運動場、笠松みなと公園と河川環境楽園を結ぶサイクリングロードの全線開通など、豊かな木曽川河畔の自然を活かした健康増進等の機会が多い場所

⑥岐阜県唯一の競馬場

昭和９年に中津川市より移転して誕生、木曽川沿いに位置し「馬」を身近に見ることができる場所

２．現状と課題

（１）「リバーサイドタウンかさまつ計画」の経緯と進捗

キャッチフレーズ
～まちの魅力創造とネットワーク形成を目指したまちづくり～

①「リバーサイドかさまつ計画」策定（平成 21 年３月）

笠松町の新たな発展のため、町の歴史・文化、自然条件を現代の社会経済的条件の中で再生させ、新たに「笠松らしさ」を付加し住民協働の理念のもとで町全体が「動いている」と実感できるまちづくりを進めてきた。

②３つの基本方針と７つの重点課題に対応する整備

ア） まちの拠点づくり

まちの駅整備→「まちの駅」「ふらっと笠松」の整備
まちづくり拠点施設整備→「川のまち笠松拠点」、国登録有形文化財「杉山邸」の整備
歴史的建造物、文化的財産の利活用→まちなか散策やウオーキングラリー等

イ） 水辺の環境を生かしたまちづくり

川の駅整備→交流の場「川の駅」「笠松みなと公園」「あずまや」等の整備
木曽川、木曽川河川敷の利活用→河川敷を利用したレクリエーション的土地利用等

ウ） イベントによるまちづくり

歴史的、文化的財産や地域特性を活かした個性あるイベントの開催
木曽川とその周辺を活用したイベントの開催

行事	利用客数（人）
笠松春まつり	13,500
笠松川まつり	17,000
リバーサイドカーニバル	10,000
みんなハッピー！かさマルシェ	15,000
計	55,500

（２）課題

①多様なニーズ対応した諸課題への対応

ア） サイクリングロードの完成による広域連携

平成 31 年３月に笠松町内にて５ｋｍのサイクリングロードが完成し、これによって河川環境楽園、木曽三川公園等の広域連携が可能となり、その拠点としての位置づけ強化が必要

イ） 季節に左右されない恒常的な賑わい交流

１万人を超えるイベント等は、毎年行われて盛況ではあるが、集客の視点からみれば、季節性があり一時的となっている。恒常性のある賑わい交流施設が必要

ウ） 新たなニーズへの対応

「癒し」や「安らぎ」へのニーズ、一方では、「体験・体感」と言ったニーズから、特に、河川法の改正に伴い、水辺への要求（ミズベリング等）が高まっており、活用の検討が必要

エ） 最新情報通信技術の導入

このエリアを中心に、ドローンの活用、IOT 技術、AI 分析等の最新技術（安全管理や入場管理など幅広く活用）を導入することが必要

オ） 地域資源である「馬」と医療等の有機的な連携

将来的には、競馬場というギャンブルイメージからの脱却するため「引退馬」の活用と、総合病院との連携による医療・福祉への「馬」の活用（ホースセラピー）の可能性の検討が必要

②歴史文化に裏付けられて令和時代にふさわしい計画（復活川湊）の整備

川湊で栄えた笠松湊を現代ニーズに合わせた河川施設「復活川湊」について検討が必要

③低利用公共用地の利活用

・木曽川堤防に隣接する中核拠点が必要であることから、市街化区域内の低利用公共用地に賑わい拠点として利活用できるか検討が必要（商業地域・準防火地域、敷地約 1,230 ㎡）

④多様な関係者の連携

・平成 29 年に岐阜大学と包括連携協定を締結。専門的で豊富な知識や人材の活用
・周辺自治体との広域連携や産官学金住医連携の可能性の検討

【検討経緯】

① 検討会

分 類	組 織 名 等
行政機関	笠松町
行政機関	国土交通省中部地方整備局木曽川上流河川事務所
総合病院	社会医療法人蘇西厚生会　松波総合病院
鉄道事業者	名古屋鉄道株式会社
周辺施設の運営事業者	株式会社オアシスパーク（河川環境楽園　運営事業者）
周辺施設の運営事業者	岐阜県地方競馬組合（笠松競馬場　主催者）
商工団体	笠松町商工会
金融機関	株式会社十六銀行
民間事業者	レシピシステム株式会社

②ワークショップ

議 題	メ ン バ ー
ワークショップＡ（ホースセラピー機能）	笠松町（企画課、福祉子ども課、健康介護課）、松波総合病院、岐阜県地方競馬組合、笠松町社会福祉協議会
ワークショップＢ（放牧場によるにぎわい機能）	笠松町（企画課、建設課）、岐阜県地方競馬組合
ワークショップＣ（アクティビティ機能）	笠松町（企画課、環境経済課）、笠松町商工会、笠松町商工会青年部

③開催日

開 催 日	活動内容
令和元年５月 29 日	リバーサイドタウンかさまつ計画検討会（第１回）
令和元年 10 月４日	同検討会ワークショップ（第１回）
令和元年 11 月 12 日	同検討会ワークショップ（第２回）
令和２年１月～２月	リバーサイドタウンかさまつ計画検討会（第２回）書面開催

「リバーサイドタウンかさまつ」の事業計画地の利用イメージなど

コンセプト　人々と木曽川が織りなす令和時代のまちづくり－笠松の原点回帰からの新しい魅力創造－

乗馬・セラピーのイメージ

SUP のイメージ

【笠松みなと公園付近の概況】

②適度に起伏がある

①ベンチ（固定）

④駐車場（30～40 台程度）

③用具入（松波総合病院寄贈）とトイレ
（可動と見られる）

⑤グランドボール用地（利用状況不明）

笠松みなと公園　四季の里広場
（県補助金整備）

③親水施設

①河岸侵食防止用根固めブロック

④史跡終点の湊跡の根固めブロック

②根固めブロックの親水兼用利用

⑥公園内のトイレ（可動）

⑤レンタサイクルポート（可動）

笠松みなと公園

①放牧場検討地

②笠松水防倉庫
（木曽川右岸地帯水防事務組合）

放牧場検討地

笠松みなと公園の整備経緯の概要

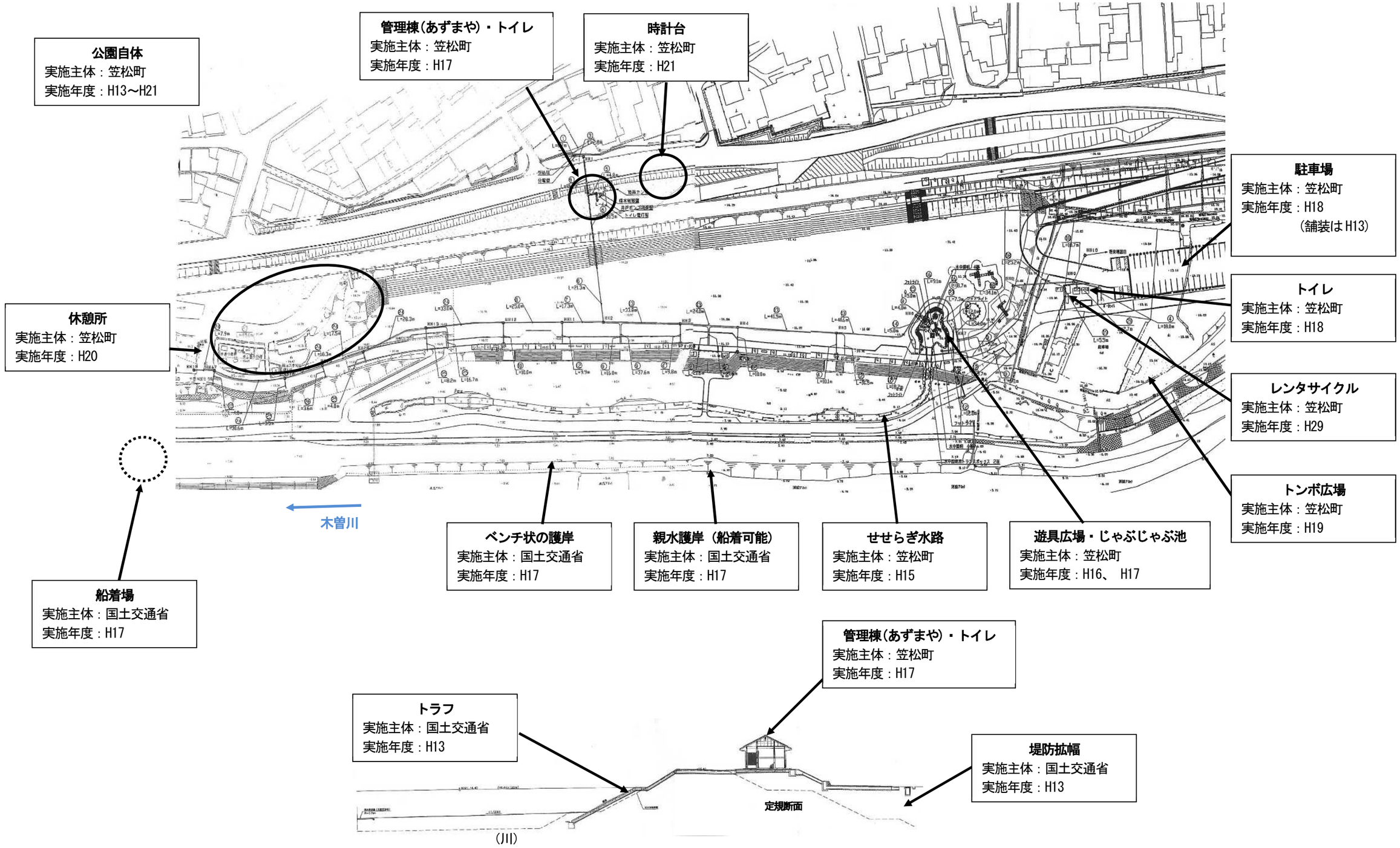
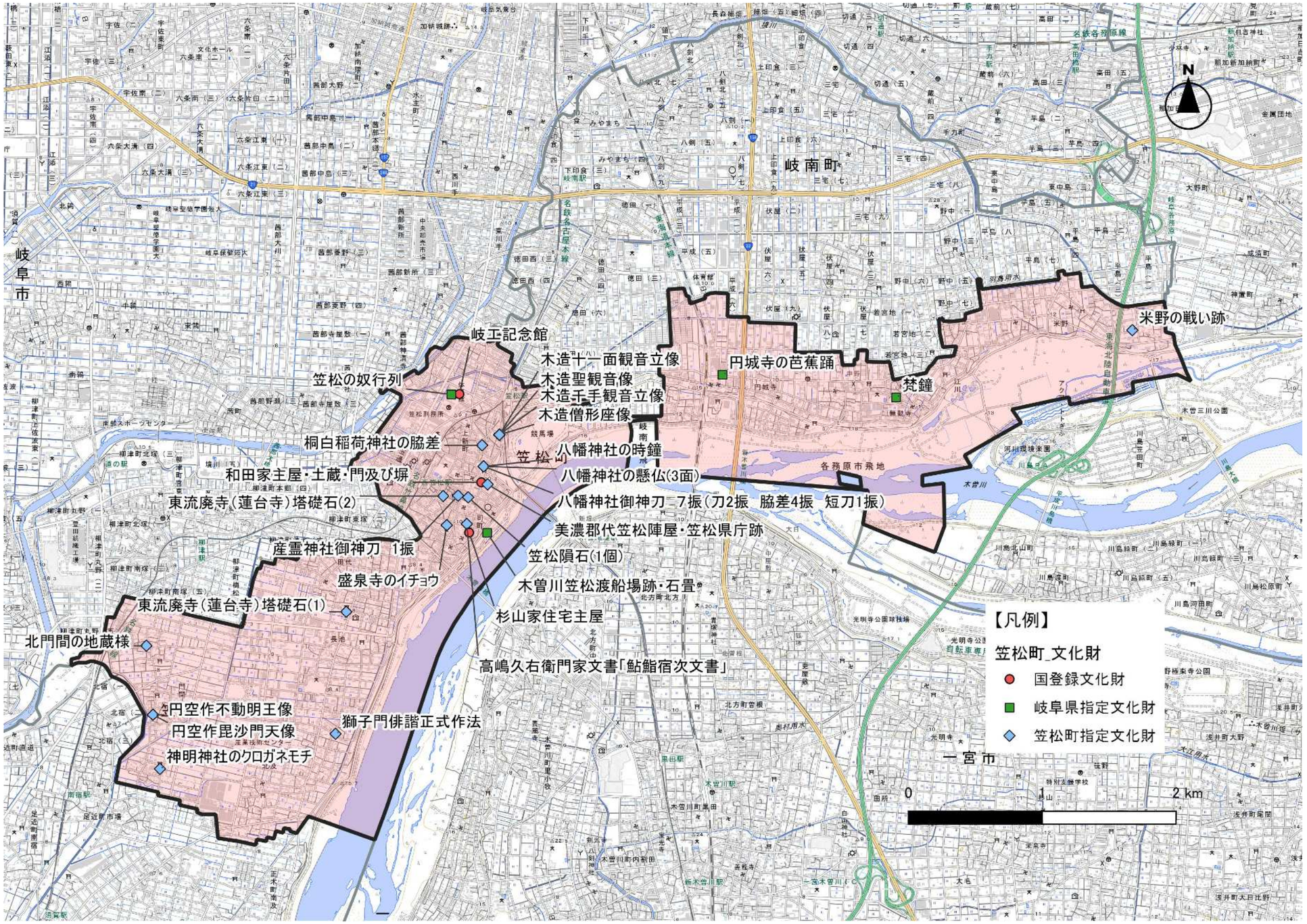
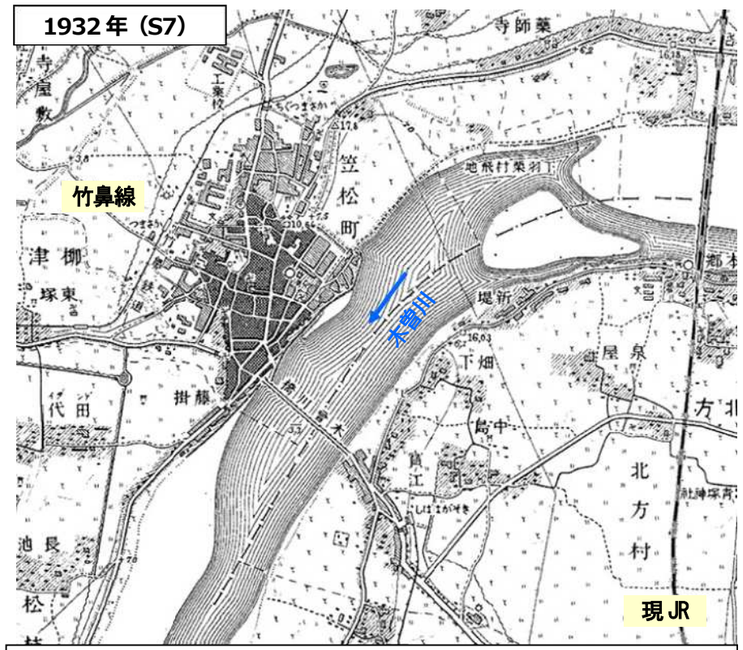


図　笠松みなと公園の施設位置と設置者等



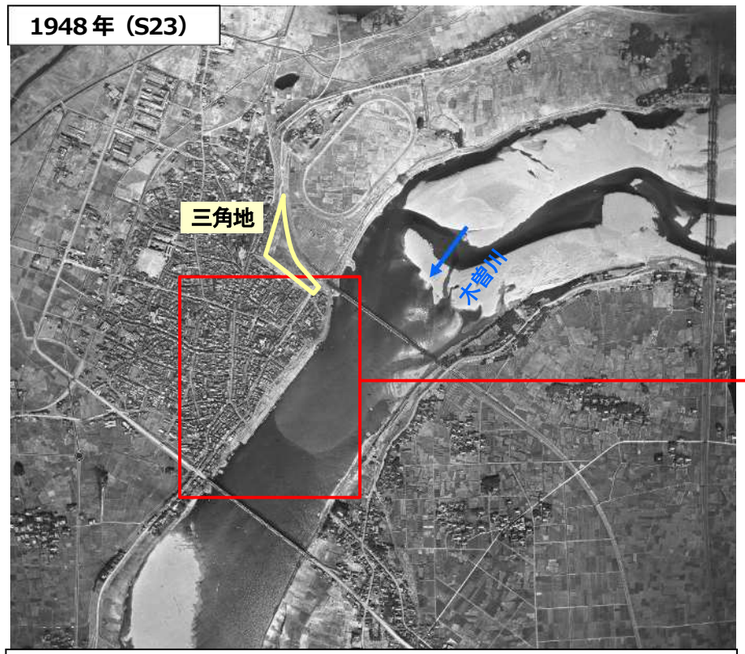
【参考】笠松町の歴史資源（文化財について）

1932年（S7）



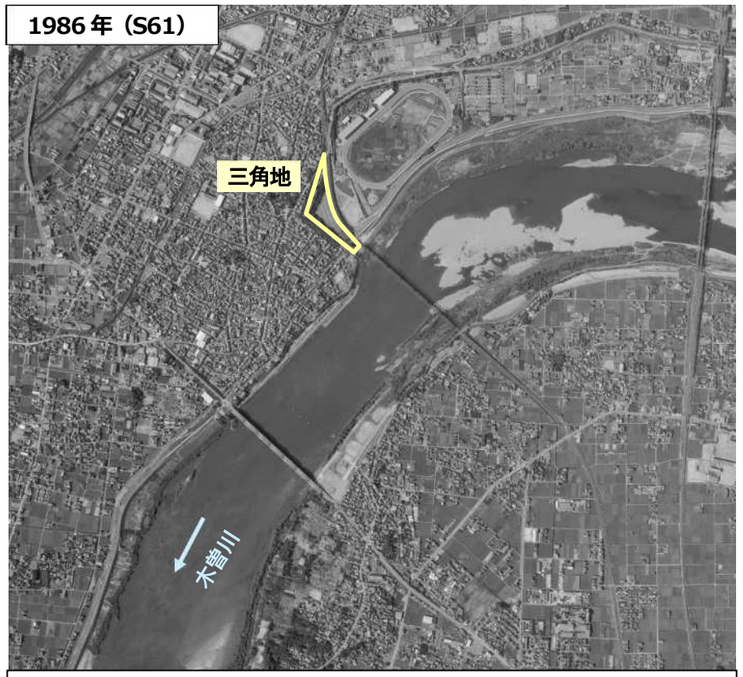
名鉄は1914年（T3）加納ー二見町間開通、1935年（S10）岐阜ー一宮間開通
現JR東海道本線は1872年（M5）開業、竹鼻線は1921年（T10）開業、木曽川橋は旧橋

1948年（S23）



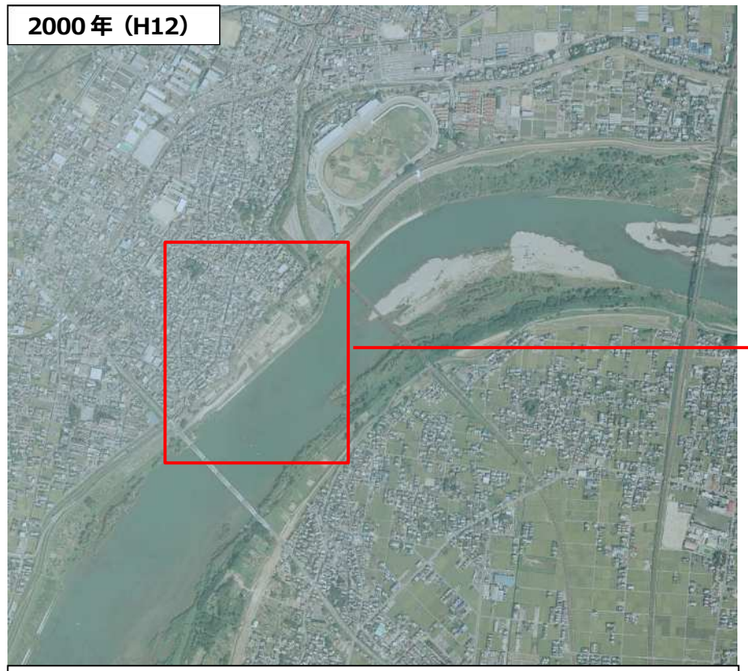
笠松競馬場は1934年（S9）に現中津川市より移転し開業、1938年（S13）に各務原競馬場と養老競馬場を統合、三角地は農地のまま

1986年（S61）



“三角地”は駐車場として活用されている

2000年（H12）



笠松みなと公園は2000年（H12）に完成（その後、改修）

地図と写真の出典）1948年は米軍、それ以外は国土地理院

【参考】笠松みなと公園とその周辺の変遷